



親しく、近く、密やかに

石田衣良

クラシック音楽には無限の広がり、それに応じた用途があります。

たとえば「あまり折り合いのよくない会社の上司夫妻を、日曜の午後、家に招いたときにかける音楽」とか、「初めて彼が泊まった翌朝、そこそこ料理の腕を見せたいので、時間稼ぎをするための音楽」など、無数のシチュエーションでクラシック音楽は大活躍してくれるのです。音楽はただ美しく素晴らしい芸術というだけではありません。

サントリーホールに足を運ぶような音楽好きのあなたなら、上記の場面で流す楽曲を選ぶ際は、きっと腕が鳴ることでしょう。ぼくなら最初のケースでは、無難なところでモーツァルトの長調の弦楽五重奏曲とか、上司の奥さんがフランスものが好きという前情報があるなら、プーランクのフルート・ソナタなんかを、音量を下げて流すかもしれません。

後者の場合は逆に、キッチンでがんばる騒音を隠すため、音量をすこしあげて、スイートなグリーグのヴァイオリン・ソナタやラヴェルのピアノ・トリオなどをきっとかけることでしょう。この選曲をするために、我が家のCDラックの前で一時間も曲選びをするのですから、音楽好きというのはたいへん効率の悪い趣味です。

賢明な読者のあなたなら、ぼくが選んだ曲はすべて室内楽というクラシック音楽のジャンルに属する作品だと、すでにお気づきでしょう。自分の家で聴くとき、お客様をもてなすとき、なぜ室内楽がいいのか。それにはちゃんと理由があるのです。オーケストラは編成がおおきく、奏者の数も多い。音量もフォルティシモでは巨大になります。そうした巨大な音を鳴らすには、コンサートホールのようなおおきな空間が必要です。

でも、室内楽なら普通の部屋で十分。豪邸に住む必要はありません。普段、自分の家で最も気軽にリアルサイズで楽しめるのが室内楽です。よく室内楽のことを、地味だとか音圧がもの足りないとかいうマニアがいます。ですが、室内楽は地味なのではなく、隣で演奏してくれるように親しく、距離が近いのです。音量が足りないのではなく、自分から耳を開いて、細かな音をすすんで聴きに行くデリ

ケートで、アットホームな音楽なのです。そういうジャンルなのだと気づきさえすれば、室内楽の楽しみはもう手に入ったも同然です。

弦楽四重奏団の四人が最初の音を出す前に、短く強く息を吸ってから、一斉に音楽が流れだす。あのとときの息の音。チェロ奏者の椅子がわずかにきゅきゅっと軋んだり、ピアニストが踏むバダルが音の波間に地味にふこふこ響く。コンサートで、そうしたノイズが聴こえてくると、ほくはとでもうれしくなります。

「音楽はほんとうに美しいけれど、それをつくり、届けてくれるのは、ほくたちと同じ人間なんだなあ。ヒトは長年の鍛錬を怠らないと、すごいことができるんだ」

おおげさにいうと、エンゼルスの大谷選手のホームランを見たときのように、人という生きものがもつ可能性に目を開かされ、失われがちな同胞への希望が再び湧いてくるのです。

室内楽は難しいものでも、クラシック通だけのものでもありません。レコードやCDのない時代、作曲家の収入源はコンサートでの演奏権と自作の楽譜の出版印税でした。当然、メインとなるのは、圧倒的に数が多い一般の音楽愛好家向けの自作楽譜になります。なかでも一番の売れ筋は室内楽です。ヨーロッパ中のブルジョワ家庭で、人気の新譜を演奏していたんですね。楽譜市場での一番の狙い目は、もちろん欠かせない一般教養のひとつとして音楽を学んだ若い女性たちです。

大作曲家も楽譜の売れゆきには一喜一憂していましたし、女性の好みに無関心という訳にはいきませんでした。険しく厳しいアートだけでなく、楽曲のあちこちにチャーミングで美しいメロディやハーモニーがちりばめられているのは、室内楽という音楽の成り立ちからして、しごく当然のことなのです。室内楽をもっと気軽に楽しみましょう。

さて、もうすぐとても親密で、とても近いチェンバーミュージックの時間が始まります。

森の中でちいさな木の実でも摘むように、耳を澄ませて音楽のチャームを拾い集めにいきましょう。お持ち帰りは自由で、重量制限はありません。

コンサートが終わった後、あなたはいくつのメロディを心に残せるでしょうか。

(いしだいら・作家)

